

娠時に著明であつた。子宮動脈血流量は一定の傾向を示さなかつたが、コントロールに比し、ほとんど変化しないものが多くみられた。子宮内圧と心電図には変化がなかつた。

考察：PG I₂ は他の血管に比べ、臍帯動脈や胎盤で多く合成され、重症な Pre-ec/ampsia 時には、臍帯や胎盤血管の PG I₂ が減少すると報告され、胎盤循環の調節に PG I₂ が関与していると推測されているが、この機序についてはまだ解明されていない。PG I₂ は大変不安定な物質であり、PG I₂ そのものの作用を評価するのはむずかしいが、腎動脈を始め種々の血管を拡張させ、血圧を減少させる一方、子宮動脈血流量にはほとんど変化を示さないものが多くみられ、妊娠によつて PG I₂ の作用が増強することが分つた。今回の実験で、妊娠時の血流に及ぼす PG I₂ の役割を推測する1つの手がかりを得た。

まとめ：PG I₂ の投与により、(1) 妊娠時の子宮動脈は、他の動脈と異なつた血流量の変化を示す。(2) 妊娠時の母体循環の変化は、非妊娠時に比べ大きい。

(3) 子宮内圧には影響を及ぼさない。(4) 非妊娠時、妊娠時ともに心電図上不整脈を認めなかつた。

16. 腎移植 100例の経験

(腎臓病総合医療センター・外科)

○高橋 公太・東間 紘・早坂勇太郎・
前田 節夫・鈴木 利昭・山下 賀正・
光野 貫一・奥村 俊子・近森 正昭・
山縣 淳・中沢 速和・合谷 信行・
瀧之上昌平・高山 裕史・中村倫之助・
寺岡 慧・本田 宏・佐中 孜・
荒 隆一・阿岸 鉄三・太田 和夫

(同・小児科)

鳴海 福星・伊藤 克己

(同・泌尿器科) 須藤 尚美・高橋 通子

吉田美喜子・梅津 隆子

腎移植は透析療法と並んで慢性腎不全の有力な治療手技であり、現在、移植腎が生着した場合には完全に社会復帰できることが常識となつている。

最近、当センターでも腎移植症例が100例を越えたので、その成績について報告したい。

1981年6月現在、われわれは102例の recipient に生体腎移植77回、死体腎移植27回行なつた。すなわち、1次移植100例、2次移植が2例である。recipient の年齢は8~48歳、平均28歳、性別は男性70例、女性32例であり、原腎疾患は100例が慢性腎炎、残りの2例はおのお

の慢性腎盂腎炎および嚢胞腎である。

今回は特に生存率、生着率に影響を及ぼす因子について検討を加えたい。

17. 当院未熟児センター3年間の臨床的統計

(小児科)

○浦本 恭子・遠藤 隆子・茂木 令子・
足立未加子・原 倫子・山田多佳子・
永木 幸子・富本 昌子・永木 茂・
原 仁・北井 暁子・中田恵久子・
杉江 秀夫・清野 明子・山口規容子・
横田 和子・福山 幸夫

近年周生期医療の進歩はめざましく、周生期死亡率の減少と共に、生存例の長期予後の報告も増加しており、とりわけ、出生体重1,000g未滿の、いわゆる超未熟児の intact survival “後遺症なき生存”を目的とした新生児医療が最も関心の高いところである。女子医大でも遅ればせながら昭和53年4月に未熟児センター(定員15床)が開設され、院内のみではなく、院外出生の種々の high risk infant の収容が可能になつた。今回約3年経過した未熟児センターの臨床的統計集計を行なつたので、ここに報告し、今後の医療の中での反省の一材料とした。

昭和53年4月~55年12月までの入院総数は377名で、院外283名(75%)、院内94名(25%)であり、新生児期死亡は377名中49名(13.0%)であつた。これを年次別にみると、53年は入院79名で死亡14例(18%)、54年は155名、死亡20例(13%)、55年は143名、死亡15例(10%)と、わずかながら死亡率の減少をみているが、その死亡率を1,000g未滿の超未熟児に限つてみると、53年は5例中5例死亡で死亡率100%であつたのが、54年は58%、55年は33%と大きな差がみられている。1,000g以上2,500g未滿の低出生体重児の死亡率は、3年間で殆ど差がないが、2,500g以上の新生児では、53年13%から55%8%わずかながら死亡率の減少をみている。疾患別の内訳としては、未熟児の特発性呼吸窮迫症候群を中心とする肺疾患が最も多く、次に黄疸、仮死があり、先天性心疾患も29例、消化管閉鎖などの外科的疾患18例、その他多発奇形など多岐にわたつている。生存例328例中、11例に事故や感染症などの遠隔死亡がみられ、この11例を除く317例中、21例(7%)に何らかの後遺症がみられている。いわゆる未熟児網膜症は、780gで出生した超未熟児1例にみられ、一側は高度の弱視、一側は失明した。この3年間に、設備、スタッ

フ、看護体制などある程度の改善はみられたが、intract survival をめざすためには、未だ多くの改良すべき点が残されていると思われる。

18. 東京女子医科大学第2病院脳神経外科における現況

(第2病院 脳神経外科)

○高良 英一・井出 光信・小豆畑 博・
山本 昌昭・今永 浩寿・門脇 弘孝・
神保 実

われわれは、昭和55年4月1日東京女子医科大学第2病院脳神経外科を開設し、約1年間を経た時点における、外来および入院患者の動向を検討した。

昭和55年4月1日より昭和56年5月31日までに当科外来における新患総数は1,092名である。その間における入院患者総数は211名であり、新患の19%が入院している。

入院患者の内訳は、脳腫瘍28名、脳血管障害61名、頭部外傷65名、その他疾患57名である。その他疾患に含まれるものは、頭痛、先天性疾患、てんかん、感染症、変形性頸椎症などである。

手術件数は、脳腫瘍25例、脳血管障害28例、頭部外傷18例、その他28例である。全手術件数は99例であり、入院患者211名の47%に手術をしたことになる。

新患を地区別に分類すると、荒川区455名、足立区267名、北区138名で、これら3区で全体の79%を占める。近接他県では、埼玉県、千葉県、神奈川県 の3県で113名の受診患者があり、全体の10%を占めている。これら3区および3県よりの新患総数は全体のほぼ90%である。

19. リエイゾン精神医学—他科より診療依頼を受けた症例の検討

(神経精神科) 田中 朱美・○高津 明美

昨年(昭和56年)の日本精神神経学会総会において、主要テーマの1つとして、「リエイゾン(連携)精神医学」がとりあげられ、総合病院での精神科のあり方などについていくつかの発表があつた。救急医療の発達に伴つてのICUの開設、重症疾患に対する腎透析、放射線療法など、医療は益々高度化する反面、疾患に対する患者の不安、絶望感なども強まつて来ていると察せられ、この現状で連携精神医学の役割はますます重要となつて来ている。

今回私共は、第2病院も含めて当院他科から当科へ診療依頼のあつた症例について報告し、他科と精神科とのかわり合い、また診療上当科として日頃痛感する問題

点などにも触れてみたいと思う。対象は、昭和53年6月1日から56年5月末日までの3年間に当科に診療依頼された435例(男212, 女223)であり、これはこの間の当科外来新患数の約17.9%に当る。この334例について、年次別、各診療科別依頼件数、依頼理由、各種基礎疾患、精神医学的診断、受診状況及び転帰、などを述べ、今回はこの中で、(1)最も症例数の多かつた内因性うつ病について、(2)意識調査を主症状とした症候性精神病、意識障害はないが基礎疾患の病状などを切っ掛けとしての異常体験反応とについて、(3)幻覚・妄想状態及びうつ状態における自殺企図などで救急入院した症例などについて検討したい。治療としては、(1)に対しては他科の疾患の合併がなければその科の医師との連携の下で治療を行ない、(2)、(3)に対しては双方の科でのそれぞれの治療が必要であり、特に(3)で各科に入院中の患者に対しては、各科の医師との緊密な連絡が必要である。いずれにしても他科の医師の当科疾患に対する理解が必須であり、当科としては他科とのコミュニケーションを密にすることにより、いわゆるリエゾン精神医学を成り立たせたいと望んでいる。

20. 興味ある回復過程を示した不安患者の1例

(東京厚生年金病院・神経科)

○星野 恵則・浅野 欣也

医師の「生甲斐は何か。」との質問に咄嗟に答をみつめ、殆んど瞬時に不安状態から脱した興味ある症例を経験した。

症例は初診時32歳の既婚女性。生後2ヵ月で、製本業を営む養父母の養女となり、実父母を知らない。養女であることは18歳頃知らされたが、格別の動揺はなかつたという。高校卒業後家業を手伝い、21歳で婿をとつて3児をもうけたが、育児期間中も子供を背負いながら家業従事は続けた。

1979年夏頃から、義父と同席の食卓で不安をおぼえるようになり、頭痛、次いで不眠も始まつた。10月1日、義父と同乗して自動車運転中に初回の急性不安発作に襲われた。以後、近所の買物などに際して時々同様の発作が起こるようになった。10月23日、東京厚生年金病院神経科初診。外来通院し、薬物療法にて頭痛、不眠等は解消したが、外出、入浴及び食事時に強まる不安感も持続した。1980年1月、義父が肺癌のため急に入院し、5月に死亡。その後、悲哀感と父に対する自責の念とが加わつた。9月19日入院したが、種々の治療に十分な反応を示さなかつた。10月20日、第2回目の外泊に出発する日